

日正寺の沿革（一）（日正寺便り S23,12,20）

明治の度政一新と共にえぞは北海道と改められ開拓庁がおかれて、北海道拓殖計画を進められるに及び或は屯田兵として移住し、或は団体移住をなし、或はそれらの縁故者を頼って渡道してくる者、年と共に多くなり、この様な世情に応じて本宗信徒の中心も、或は縁故を頼って移住し、千古の原始林に斧鋤を入れ開墾に従事する者が各地に散在する様になった。

其中で江別に香川から来た渋谷一家が居り、生振に尾張から来た関戸一族が住んで居た。これ等の本宗信徒は遠く先祖のほかをはなれた兄弟親戚とも別れて来たが、唯信仰のみは決して捨てる事が出来なかったのである。

偶々石井広進師は、これら北海の地に開拓に従事する本宗信徒を慰向激励し、且つ信徒間の連絡をとる目的を以って老軀をいとわず渾身渡道された。師は六十一歳にして出家せる極めて強信の方にして此の正法を一人でも多くの人に信ぜしめたい気持ちから少しの縁故があると、そこを尋ねて法談をなし、わからぬ所が出来ると「自分は老年にして出家したので、そこの所はわからぬから先師にきいてくる」とて先師に教をうけ、又尋ねて法談した位である。然らば何時死んでも迷惑をかけぬためと、何処に行くにも棺を背負ふて居られたといふ事である。此の石井師が各地に信徒に連絡をとってくれたために「どこそこには誰それが居る」「どこそこの村には何処から来た信者が居る」といふ事がわかり、信行増進の上に異体同心の上に大変役立ったのである。

石井師が生振に行かれた時に木の間越しに見えるウスズミの衣を着た坊さんを見て、まさかこんな所へ尋ねてくれるとは夢にも思わなかったので「日蓮様の再来ではないか」と我が眼を疑った程であると。いかに信徒が喜んだ事かは此の一事を以ても想像される。此の石井師の渡道により江別と生振との連絡が先づとれた。石井師の渡道は本宗僧侶の渡道の最初である。而して日正寺としては忘れる事の出来ぬ恩人の一人である。

次いでさぬき高瀬の大坊から小笠原寛円師が渡道、江別に住し信徒の化導と教会建立のため種々努力されたのであるが、大晦日の日に渋谷家より森家に行かんとして雪魔にさえぎられてしまったのである。北国の冬は実際にすんでみなければわからぬのであるが、実に恐ろしきものは吹雪である。たとえ法のためとは申せ誠に悲痛の至りである。然し乍ら此の身軽法重の精神こそ宗祖日蓮大聖人より脈々として受けつがれたもので尊くも有難い極み。時に明治廿九年十二月三十日なり。

日正寺の沿革（二）（日正寺便り S24,1,7 第 2 号）

此の先師の遺業を達成すべく次いでさぬき大坊より小笠原慈完師こられ、さぬき信徒の江別深川方面に化をたれ遂に深川に一字を建立せられた。又中島廣正師は明治三十二年の頃愛別より出張化導の結果漸く江別屯田の四番町に家をかり御本尊を安置し、次いで江別に家を借りて此処に奉安す。たまたま明治三十九年九月時の法主大石日応上人は土屋日住師、阿部日正師等を随えられて北海道巡教にこられ御本尊を授与され又宗祖御尊影が出来あがり御開眼された。この御本尊には『明治三十九年九月廿一日北海道巡教の砌大法弘宣教興隆寺建立の功により授与之。』担任教師慈隆坊日建並総旦徒中とあり。」(日正寺什宝)又宗祖御尊影には「明治三十九年九月北海道巡教の砌江別道山興隆寺常住」とある。(現在の御尊影)

日正寺の沿革（三）（日正寺便り S24,1,7 第 2 号）

とにかく山号次号が出来て居り御本尊御尊影がおまつりできたのであるから借家とはいえ今迄の苦心が実を結んだのでありますから信徒一同の喜びは一方ならぬものがあつたと思はれます。然し乍ら江別生振を合わせても十数軒の信徒では経営も仲々容易ではありません。おいしい事に廿三年にして此の江別の地をはなれ対雁の関伊助氏宅に移すの止むなきに至つたのであります。其の後深川函館愛別等から機会のある如に巡化されたが功あがらずして年移り大正七年となりました。たまたま大正七年八月に札幌において開道五十周年記念博覧会が催されました。それを機縁として各宗は専ら伝道に力をそそぎ恰も宗教博覧会の如き観さえ呈したのであります。時に田辺法広師は愛別より紹介状を持参生振信徒を頼り来たり、次いで单身街頭に立ちて折伏演説を開始したのであります。その熱心にうたれ生振信徒も外議を引きうけ、更にその効果あるをみて関戸金三郎氏同鏡松師等相はかりここに本宗布教陣の精鋭来札し之を援けて一人折伏戦をてんかいたしたのであります。各宗も夫々本山の管長とか布教師とかが来て街頭布教をしていたのであります。本宗の伝道が始まるや他の各宗の傍聴者はなくなり皆本宗の方に集まって来聴し為に交通途絶し、巡査が交通整理にあるといふ有様にて極めて盛況を呈したのであります。これこそが連夜にわたり小笠原師は時計台をかりて大演説を開催した程であります。

日正寺の沿革（四）（日正寺便り S24,1,7 第 2 号）

一方生振信徒は一日の野良仕事を終えてから二人づつ交替で札幌迄出かけて来て街頭布教の準備や僧侶方の接待等に涙ぐましい援助を続けたのであります。かくて中田氏は街頭演説に用いる机を求めに入りたがる機縁となり、日蓮正宗に帰伏遂に改宗せられ、又菊池氏は毎夜かかさず法門を拝聴して改宗する等かくして二人三人と改宗する方が出来たのであります。これに実に日正寺の前身

たる札幌教会の出来るもといでありまして此の大正七年を以て日正寺の開創とするのであります。たとへ三人でも百人でも信者が出来たならば指導者とその集会所の必要は当然の事でありましてここに田辺法広師がその再任指導者となり信徒一同の浄志ここにかたまって山鼻に漸く一軒の家を求めご本尊を安置し奉ったのであります。然し乍ら間もなく田辺師も札幌をはなれ家も手ばなさねばなくなったのは誠に残念の事でした。此処に再び旧信徒は指導者として誰を迎えるかにつき頭をなやまし、開教の恩人たる小笠原師及び有元師の高弟にして新進気鋭の真弓智広師を迎えたのであります。一方集会場については新旧信徒熟議の結果現在地に堂宇を建立する事となり明治三十九年一月より寄附勧募を始めたのであります。その意書には「木、道民思想界の核心を以て任ぜんと欲する同士相はかり」とぼうとうに書いてありますが、実に意気まさに天を気宇が伺えるのであります。その時の名簿によれば石狩江別及び市内新信徒合して二～三十九名を数えているのであります。かくて三月三日に工事契約が成立しその年の秋には現在の建物(但し現在のくりを除く)が新築され十月御会式には盛大な入仏式が執行されたのであります。信徒の喜びはいかばかりであったでせう。真弓師は信徒の化導と共に教会設立の手続きに力を致せられ大正十年二月十六日附を以て道庁より許可あり二月十六日には本山より正式に教会主管者に任命されたのであります。ここにおいて札幌教会(日正寺寺号公称以前)は完全に成立をみたのであります。